紀行論文

北軽井沢の観光デザイナー

――草津軽便鉄道の構想を中心に――

小　川　　功

“Tourism Designers” originated Kita-Karuizawa: A close look at Promotion of the Kusatsu Light Railway Co. between Karuizawa Resort and Kusatsu Spa

Isao OGAWA

要　旨：北軽井沢は群馬県に所在する高原リゾートであるが、県境を越えて長野県軽井沢にあやかった地名を有する。第二の軽井沢を目指した亜流者が続出する中で、この地域の発展を大きく支えたのが草津軽便鉄道であり、旧名の地蔵川を捨て正式の駅名に「北軽井沢」を採用したことが効果的であった。学生達が北軽井沢に宿泊して周辺を観光デザイナーとして現地調査する場合の参考となれば…と本稿を作成した。
キーワード：北軽井沢、観光デザイナー、草津軽便鉄道、松本隆治、水野豊

北軽井沢には跡見学園の研修所があるため、周辺はよくご存じの方も多いだろう。筆者も昭和34年８月以来、この方面を何度か訪れ、最近では平成25年９月跡見ニューツーリズム研究会の主催したツアーの一員として北軽井沢に宿泊して、今回写真で紹介する場所などを見学した。観光分野でのフィールド・ワークの対象地域としての軽井沢一帯は明治期外国人によって着目された我が国最初の本格的リゾート地としての豊富な調査素材に恵まれた場であることは過言を要しない。今回取り上げる北軽井沢はこうした軽井沢の名声にあやかって第二・第三の軽井沢を目指し、群生した亜流の一つである。「以前は軽井沢といえば、ここ〈旧軽井沢宿〉のことで…その後別荘地が西へのびるにしたがって軽井沢の名称に含まれる地域が広くなった」[(1)]結果、今日では当然に軽井沢の領域に包含されている千ケ滝地区も大正期までは旧軽井沢の亜流にすぎなかった。しかし当該地区から西武、星野といった巨大観光資本が誕生し、今日では一流のリゾート地としての名声を確立している。そうした意味から当該地区の将来性を見抜き、時宜にかなった観光施設を次々と構想し、実現させてきた堤康次郎、星野嘉助（歴代）[(2)]らは並外れた観光デザイナー[(3)]と評価できよう。

これに対して北軽井沢周辺にはどのような観光デザイナーの活躍や見込み違いがあったのかについては、一部松室致（後述）らを除けば残念ながらあまり知られていない。軽井沢と草津の双方に目配りした書籍は軽井沢町を中心に長野原、妻恋を含む３町２村を独自に「大軽井沢」と定義する町議で運送業者（丸運軽井沢運送店主）の稲垣虎次郎（漂萍）による私家版の『大軽井沢の誇り　草津温泉の誉れ』[(4)]があるほかは余り見掛けない。軽井沢に関して書かれた膨大な著書・研究書（巻末参照）の中には北軽井沢に言及[(5)]するものもある。

そこで北軽井沢調査の手始めとして跡見の図書館が所蔵する写真－１の『軽井沢・草津遊覧案内』（昭和４年１月刊）を閲覧してみよう。同書に掲載の写真－２の『日本唯一の高原電車　草津電気鉄道沿線案内』の鳥瞰図には地蔵川駅から改称したばかりの北軽井沢駅前に法政大学村、法大村倶楽部が描かれ、欄外の沿線案内に「北軽井沢…我社分譲別荘地ノ外ニ、法政大学村、一匡文化村、中外拓殖会社経営ノ別荘地アリ」（日本）とある。このすこし前大正12年11月刊行の『草津軽便鉄道沿線案内』の金子常光画伯の鳥瞰図には地蔵川駅前に「松室致氏経営地蔵川避暑地」が「日本鑿泉合資会社経営地蔵川別荘地」とともに描かれ、裏面の「沿線ノ名勝」には吾妻牧場の「一部を吾妻避暑地、地蔵川別荘地に分割した」（金子）とある。大正12年から昭和４年のわずか数年で北軽井沢周辺が大きく変化し

写真－１　『軽井沢草津遊覧案内』草津電気鉄道、昭和４年１月刊（跡見学園女子大学図書館所蔵「跡見観光コレクション」）

写真－２　「日本唯一の高原電車」案内図（『軽井沢草津遊覧案内』所収）

たことを示している。北軽井沢のようにたとえ著名なリゾート地周辺に所在していたとしても、以下に述べるようにリゾート開発が決して一筋縄にはいかぬ難物だったことも判明する。こうした跡見観光コレクションや、筆者のゼミ生だった矢野綾香さんから2009年12月提出を受けた論文「草軽電鉄―廃線47年の歴史―」の付属資料として提出された矢野家所蔵アルバムの古い写真（写真－３、８）等を手がかりとしつつ、名も無き群小業者が乱立・興亡した昭和初期の北軽井沢周辺にタイム・スリップした過去旅行を試みてみよう。なお本稿作成にあたり、巻末に掲げた老川慶喜、安島博幸両氏らの優れた先行研究に多くのご示唆を頂き、また過去の現地調査の際などに今城光英、山田俊明、鶴田雅昭各氏らからご教導を受けたことに深謝したい。今回のツアーで北軽井沢観光協会[(6)]「北軽井沢ふるさと館」の展示資料につき詳しくご説明頂いた点にもお礼申し上げる。なお紀行論文としての頁数の制約から割愛した観光デザイナー間の相互関係やリスクマネジメント能力に関しては別稿[(7)]を参照されたい。

１．北軽井沢の概要と北軽井沢駅舎

昭和４年地蔵川を開発し本格的に分譲開始した法政大学村の手で地蔵川駅の駅舎を新築し草津電気鉄道[(8)]（以下本稿では引用箇所等を除き、時期を問わず最終的な社名の草軽で呼ぶ）に寄付した。これが登録文化財として現存する

写真－３　北軽井沢駅舎（矢野家所蔵）

北軽井沢駅である。昭和９年の案内書には北軽井沢「停車場は最近改築せられ善美を尽して、神社の拝殿を見るが如く、貴賓を送迎するに足る」（誇り，p43）とある。写真－３のように駅舎は和風意匠の木造平屋建、入母屋造、真壁造りの白漆喰塗で善光寺を思わせるような和風の大屋根と、格子状の洋風窓を組合せた和洋折衷で、正面玄関の欄間には法政大学を象徴するＨがデザインされている。

これより先、堤康次郎は大正12～３年ころから軽井沢の隣村・西長倉村でも新たに別荘地を開発した際に、地元でも価値があるとは思ってもいなかった「古くから地蔵ケ原と呼ばれ…草原と湿地ばかりの土地」（町誌，p244）を知恵を絞って「南軽井沢と称」（誇り，p26）したという。この南軽井沢という名前が別荘地名に使用されて以後に、北軽井沢でも「法政大学の教授・講師の諸先生六十名が挙って」（地蔵，p13）昭和３年開村した法政大学村の関係者が地蔵川避暑地周辺の土地を、隣接する軽井沢の北に位置することから、仲間内の通称として「北軽井沢」と呼び始めたといわれる。おそらく南北軽井沢ともに地蔵という抹香臭い旧字名よりも外人避暑地として知られた軽井沢のもつハイカラなイメージにあやかったものであろう。インテリ大学村の斬新なアイデアに倣うように草軽当局も昭和３年２月29日鉄道大臣宛に「地蔵川ヲ北軽井沢ト駅名改正届」（＃17営，p3）を提出し、正式に変更した。こうした最中に大学村が寄付した北軽井沢駅は名前に負けず新軽井沢～草津間で最も乗降客が多い、にぎやかな駅となった。昭和４年12月期草軽の『営業報告書』には「沿道随一ノ発展地ナル北軽井沢駅ハ刻々面目ヲ更メ、東部一帯ノ法政大学村ハ前年度迄ニ既ニ百三十戸ノ別荘、旅館及ヒ商舗ノ建築ヲ了リ、本年亦約七十戸ノ新築家屋出来シ、明年ノ計画ニナルモノ家屋数十戸、ゴルフ場並ニプール等ナリ」（＃18営，p4）とある。これより先、萩原秋水も草軽の吾妻避暑地を「数年を出ずして第二の軽井沢が現出するであらう」（萩原，p191）と予測したが、新築・改称直後の昭和６年湯河俊次は北軽井沢の避暑地を「草津電鉄北軽井沢付近の高原は第二の軽井沢として近年非常に発展した所です。茲には法政大学村、林間俳句学校、中外拓殖会社経営の文化村等があって、モダン別天地が建設されて居ります」（湯河）と「第二の軽井沢」と評している。

長野原町の成立後、北軽井沢という通称が北軽井沢駅付近を中心に地蔵川、地蔵堂、応桑大屋原などのほか鬼押出し等も含めた広域エリアの総称として広く使われている実態を踏まえ、長野原町の正式な字名となった。

２．浅間牧場・吾妻牧場と牧宮神社

北軽井沢駅前に鎮座する牧宮神社の石碑（写真－４）には祭主・北白川宮と所有されていた浅間牧場の由来が書かれている。最初の浅間牧場は東西20キロ、南北18キロの広大な敷地で現浅間牧場の約４・５倍、北軽井沢の全域に近い広大な面積を占めていた。育馬部では軍馬の育成も行われたが、北白川宮が台湾征討近衛師団長として出征し台湾で病死した後は、経営がうまくいかなかったようだ。

写真－４　牧宮神社本殿と石碑（平成25年９月30日筆者撮影）

明治40年弁護士で実業家の松本隆治らが吾妻牧場株式会社を設立し、日露戦後の起業ブーム期に暗躍したバブルの主犯・小栗銀行より借り入れて北白川宮家より牧場の払下げを受けた。吾妻牧場は「面積約四千余町歩を有し牧畜農園の規模頗る広大」（一班）で、「群馬県吾妻郡長野原町大字応桑と称する地で海抜四千呎、信濃、越後、上野、三ケ国境の地域広袤十里の平野、吾妻高原の一部で、別荘地としてはすべての条件に適合せる、洞天福地の仙境である。此地域は明治の初年某宮家の御所有に帰し、多年牧場となって居た跡で、自然に俗塵を絶ちて、秀霊の気に満ち…」（柏村，p58）ていた。しかし起業熱が去って小栗銀行があえなく破綻、共謀関係の北海道拓殖銀行がやむなく肩代わりした。吾妻牧場会社は大儲けを企んで競馬場を計画中、明治41年11月西園寺内閣による馬券禁止で競馬場計画は「画餅に帰し一時茫然自失するの状況」[(9)]となり、結局大正４年頃経営破綻、解散したものと伝えられる。破綻後牧場資産は競売に付されたと推測されるが、処分の全容は未解明である。敏腕弁護士でもある松本隆治が競売を回避するため一身同体関係にある草軽・日本鑿泉等に早目にめぼしい資産の名義を付替えた可能性もあながち否定できなかろう。その後も広大な牧場は草軽、南木山組合、日本鑿泉、亀沢牧場、嬬恋村営牧場など、少なくとも数ブロックに分割された模様である。現在の浅間牧場は、この時は嬬恋村営牧場を経て昭和６年群馬県畜産組合連合会の経営となった。（きたかる，p4～5）

３．桜岩地蔵と嬬恋の鬼押出

草軽の沿線案内図には北軽井沢駅から「鬼押出岩　溶岩渓」までの道路の上に乗合自動車が描かれ、欄外の沿線案内に「北軽井沢…夏季ハ駅ヨリ、本社直営ノ乗合自動車ノ便アリ」（日本）とある。北軽井沢駅から地蔵川温泉まで昭和３年５月９日開業（歩み，p2）したばかりのバス路線が同社最初の直営乗合自動車として描かれ、同社の分譲別荘地の端（すなわち跡見研修所の隣接地）には地名の由来にもなった桜岩地蔵（写真－５）が鎮座している。「北軽井沢ふるさと館」展示中の『吾妻別荘地平面図』（大正13年４月）には地蔵川の西岸に「桜岩公園」があり、現在跡見研修所が建っている辺りの区画には福島甲子三、原田元貞、下妻富次などの所有者名が記入されている。

写真の桜岩地蔵は「浅間山大噴火の際土中に埋没せる」（金子）往古の遺物を草軽「鉄道測量の際、地蔵川別荘地を貫流する地蔵川の上流に於て発見し…本社之れを桜岩に奉祀」（金子）したものである。草軽では昭和２年８月７日「桜岩地蔵尊ハ由緒深キニモ拘ラス、従来殆ント顧ミラレサリシヲ遺憾トシ…第一回ノ法会ヲ営ム。遠近ヨリノ参拝者多数アリ、毎年例祭ヲ営」（＃16営，p5）んで沿線名所に仕立てた。

また桜岩地蔵尊の先、万座温泉への途中にある鬼押出（溶岩渓）が有名である。箱根土地は万座温泉の湯を軽井沢まで引こうと計画した時、天明３年に流出した奇岩に着目した。大正９年鬼押出しと六里ケ原に及ぶ80万坪の国有林

写真－５　桜岩地蔵尊の地蔵石像群（平成25年９月30日筆者撮影）

を天然記念物の保護を打出して坪５銭以下での安価な払下げを前橋営林署へ願い出て許可を受けた。（堤，p92）堤康次郎は翌10年には万座温泉の開発に乗り出し、温泉、湯花、硫黄の採取権や嬬恋村の土地232万坪と鹿沢温泉の採取権・借地権を取得した。嬬恋の土地は大正15年約140万坪の軽井沢高原吾妻別荘地として坪１円50銭で売り出した。（堤，p208）

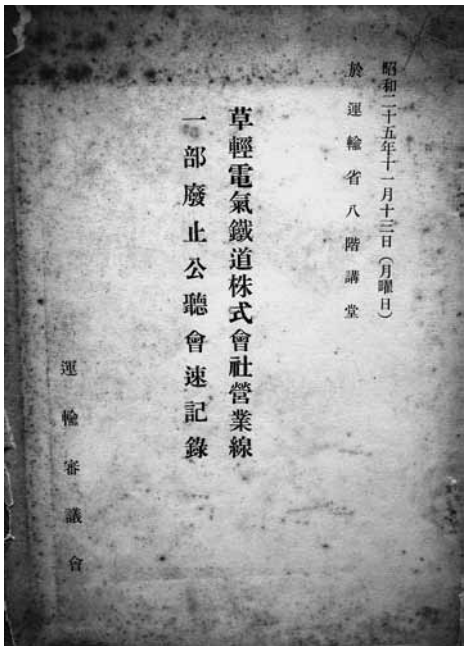
11年地蔵川別荘地経営者の水野豊は北白川宮大妃殿下が「地蔵川駅より押出の壮観を観賞せられたるを紀念として…之れに溶岩渓の新名称を付して広く宣伝」（金子）した。しかし北軽井沢方面からの必死の宣伝にも関わらず、昭和初年までの鬼押出しは軽井沢方面からの便が悪かったため、岩窟ホールもなく、小さな茶店が一軒あるのみの寂しい状況であった。（大学村，p147）当地を経由する自動車専用道を建設した箱根土地は早稲田大学川島定雄助教授に設計を依頼、昭和10年８月鬼押出し上に岩窟ホールを完成させ世間の評判になった。（堤，p209、大学村，p197）しかし野鳥を愛するナチュラリスト・三代星野嘉助（嘉政）は社名は出さず「一企業が囲いをめぐらせて入場料をとる」（星野，p100）姿勢に異を唱えた。この岩窟ホールや、現プリンスホテルチェーンの出発点ともいうべき軽井沢グリーンホテル等の設計者川島定雄は奈良県出身で近江商人・六代・川島宗兵衛の養子となった。宗兵衛の妻としは八木荘の堤家の隣人・小杉佐兵衛家の娘であることから、堤との地縁関係が深かった[10]。

４．困難の連続だった草軽の経営

草軽の最初の構想は草津の老舗旅館・望雲館主の黒岩忠四郎が「殆ど十年間一身を挙げて尽瘁し之が為めに家産を傾くるも厭はず」（萩原，p191～2）草津興業会社を創立したことに始まる。「当初何人も此計画を無望（ママ）の暴挙であると唱へた」（萩原，p186）状況であったが、「草津鉄道同盟旅館」すなわち「草津の温泉宿屋に於ても之に賛し同盟して起債し其株式を引受け事業を助けたるもの」（萩原，p192）が現れた。しかし狭い温泉街の中で「草津鉄道引受株に対する同盟組合と、非同盟者との対立が甚だしく…互いに反目し合い、時に敵対行為にまで及んだ」（角貝，p91）という。

松本隆治法律事務所所属となった弁護士・水野豊（M41.2.24 東朝①）は会社設立直前の大正元年８月吾妻「牧場の関係者と、草津温泉の関係者とで、草津軽便鉄道株式会社を組織し、目下軽井沢から鉄道敷設準備中であるから、来〈大正２〉年の夏季以前迄には、〈吾妻〉牧場迄は開通が出来る見込」（水野，p27）と期待を込めて書いている。大正２年８月草津軽便鉄道設立に際し前述の通り経営難の「吾妻牧場株式会社より約十万坪、草津町より温泉地付近約六万坪の無償割譲を約せり…同会社付属吾妻避暑地に隣接せる最も好位置の場所…草津町より本鉄道にたいし開業五ケ年間は年二朱、次の五ケ年間に於て配当が年七朱に達するまでは年五朱以内の補給を為すことを契約せり」（一

写真－６　「鉄道財団担保付草津電気鉄道株式会社社債募集　織田信託」（筆者所蔵）



写真－７　「草軽電気鉄道株式会社営業線一部廃止公聴会速記録」昭和25年（筆者所蔵）

班）と双方からの支援内容が明確化した。

こうしてスタートした草軽の経営は苦難の連続であった。写真－６の社債募集の趣旨説明の中で草軽は「吾妻川電力株式会社（資本金八百万円ニシテ近キ将来ニ東京電灯株式会社ト合併ノ筈）ト姉妹関係ヲ結ビ同社発電所工事材料ノ輸送ヲ一手ニ引受ケ、且全線ヲ電化シテ旧来ノ面目ヲ一新」（社債）すると展望した。吾妻川電力は沿線５カ所の発電所建設の輸送上の必要から草軽を系列化し、草津延長に伴う配当補給金として2.2万円を拠出するなど支援姿勢を示した。同電力は非電化私鉄を系列化して電化し、余剰電力の安定供給をはかる意図もあった。大正12年10月「日本一の知恵をもった」（S2.6.11D）河村隆実が吾妻川電力を代表して草軽社長に就任すると、社名変更、増資、社債発行、電気事業・自動車兼営、電化、延長等の積極策を相次いで打出した。河村は増資実現のため、まず同社の汽車が出す火の粉に悩む沿線大地主の松室致法政大学総長を無煙・電化のためだからと口説き落し、優先株主への特典た

写真－８　浅間山麓を往く電気機関車（矢野家所蔵）

写真－９　上州三原駅の電気機関車（昭和34年８月５日夕刻に筆者撮影）

写真－10　北軽井沢駅に再現された草軽電気機関車（平成25年９月30日筆者撮影）

る無償提供予定地として広大な土地を寄付させた[11]。

しかし草軽は昭和７年社債が返せなくなり財務整理を余儀なくされた。昭和４年発行の案内書そのものが当時の同社の経営内容からすれば豪華すぎる内容で、おそらく刊行直後に発行した第１回社債の募集を意識した誇大宣伝作戦であったと考えられる。

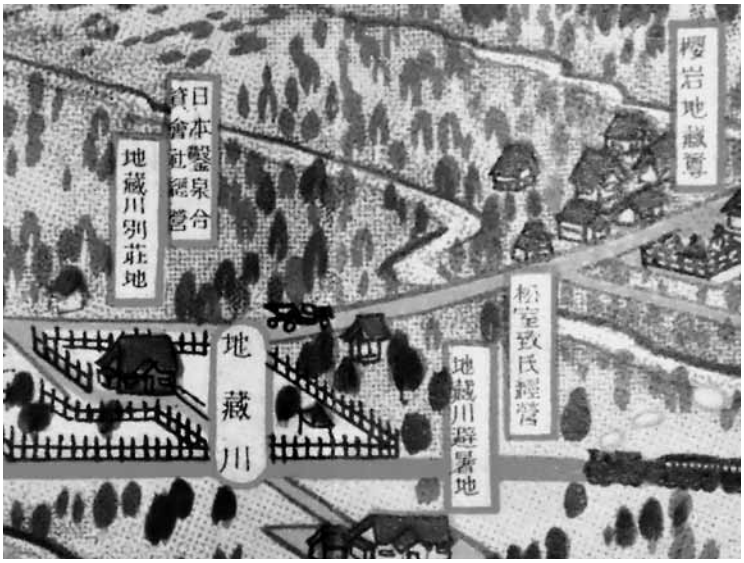
東急傘下になっていた戦後の24年９月１日キティ台風により沿線各所の線路崩壊など多大の被害を被った。10月７日臨時株主総会を開催し、営業不振のため新軽井沢―上州三原間37.9km の運輸営業廃止を決議、10月26日運輸大臣宛に同区間廃止を申請した。その折りの公聴会が写真－７である。25年８月４日ヘリン台風により吾妻川の橋梁が流失、創立以来最大の被害を被った。

昭和34年８月５日筆者は写真－９のように新軽井沢発14：40、上州三原17：02着、17：03発、草津温泉着18：15の９列車に乗車した[12]。初めて乗車した筆者は幅北光氏の表現を借りると「機関車のうえに、角を一本伸ばした甲虫状のＬ型電気機関車が、時速十八キロというのろい速度で、山路を蛇行しながら箱を引っぱって草津温泉までのぼっていった」（幅，p169）という某テーマパークの鉱山列車より凄い実体験をして、草軽に魅了されてしまった。昭和９年の案内書の「鉄道は蜒々屈曲岩を鑿り谷を渡り、山を越て…平地を直行する箇所は極めて稀にしてＳ字形を為して居る…愉快に遊覧旅行を為すことを得べく実に日本無双の高山鉄道」（誇り，p41）との表現と全く変わらない３時間半もの遊覧鉄道旅行であった。実は34年８月14日７号台風により、同社のアキレス腱ともいうべき吾妻川橋梁が再び流失、軽井沢自動車車庫が全壊するなど甚大な被害を被った。この橋梁流失で嬬恋―上州三原間はバスで代行、11月13日新軽井沢―上州三原間の鉄道営業廃止が許可され、35年４月25日新軽井沢―上州三原間の鉄道営業廃止、37年１月31日上州三原―草津温泉間の全線廃止へと事態が急展開する。

思えば筆者は橋梁流失のわずか９日前に草軽全線を完全乗車できたのだが、以後夢には見ても再び乗車すること一切叶わず、一期一会の得難い機会を与えられたことになる。北軽井沢コンソーシアム協議会などのご尽力で北軽井沢駅舎に併設された草軽機関車の木製レプリカ（写真－10）はディテールの再現には限界もあるものの筆者には青春時代の幻を想起させるに十分なものであった。

５．日本鑿泉合資と水野豊

日本鑿泉合資会社は「上水道灌漑用工業用遊園地噴水用等鑿泉請負事業」を目的として松本隆治により明治45年４月麹町区有楽町に資本金12万円で設立された科学的鑿泉業者の先駆である。代表社員の松本が11万円、同じく水野豊が１万円を出資した。（帝 T5，p61）



写真－11　地蔵川避暑地周辺の拡大図（『草津軽便鉄道沿線案内』）

松本隆治は前述の吾妻牧場を経営する傍ら、草軽、日本鑿泉にも深く関係した。大正２年同社は日本で最初に深さ160メートルの本格的な深井戸掘削に成功した。写真－11の地蔵川別荘地は大正12年10月時点では「現在丸の内仲通三号館日本鑿泉合資会社々長水野豊之を経営す。海抜凡三千六百尺、一定の区画をなし衛生的高原別荘地として分割譲渡をなしつつあり。已に建築せられたるもの地蔵川倶楽部を初めとして十余棟あり。懇切に旅客を待遇す」（金子）「信越線軽井沢駅より草津電鉄に乗換ゆれば直ちに到達することを得。上野駅より約七時間…別荘地に於ける、文化生活の設備の点に至りては、些の遺憾なく、都人の避暑地としては、いかにも理想的の好住地である。鑿泉界に成功したる水野〈豊〉君が、其余裕ある頭脳を、此等の方面に用ゐたるに見ても、君の多々ますます弁ずる。天縦の才能の偉大なるを認め得るではないか」（柏村，p58）などと評されている。

６．中外拓殖（文化村経営）と宮崎寛愛

桜岩地蔵から浅間の溶岩渓へ向かうバス道に写真－12の嬬恋ホテルがあり、案内書には「中外拓殖株式会社も又この地に別荘地開発を試み、数十軒の貸別荘及び、設備完備した嬬恋ホテルの経営をして居ります」（遊覧）と中外拓殖の名が出てくる。大正12年の沿線案内図も桜岩地蔵の奥に中外拓殖株式会社経営嬬恋避暑地、中外拓殖株式会社経営古滝遊園地を描き、「中外拓殖株式会社経営の嬬恋避暑地は、地蔵川別荘地に連り、総計一百六十余坪の地積を有し、其内大部分は已に分割をなし、古滝付近には二百余坪の嬬恋ホテルを新築し、〈12年〉八月より開業せり。其外古滝遊園地並に大運動場の新設も計画中にて、目下工事を進めつつあり、将来電灯、電話の設備、自作の農場にて出来る新鮮なる果物野菜は素より其食料品並に日用品の配給を企画する見込なり」（金子）と紹介する。大正15年の案内書も「中外拓殖会社之れを開拓し、嬬恋ホテルを経営して避暑客を誘致し専ら土地の分譲に努む。地蔵川は…古滝と称する勝景を顕はし…避暑家屋の所々に点在するを見る」（誇り，p44）と紹介する。昭和６年７月嬬恋ホテル出張所の名前で「信越線軽井沢駅より草津電車北軽井沢下車、海抜三千七百尺の高原。白樺と落葉松とに囲まれたスマートな小別荘の村。半洋風。湯殿。水道。電灯完備。夏中三十五円・四十五円（一日ぎめ二円・二円半）至急案内書の御請求を乞ふ。東京浅草南元町（電浅草二六〇八）嬬恋ホテル出張所」（S6.7.20 読売夕②）と「嬬恋高原の簡易貸別荘」広告を出した。

中外勧業は群馬県吾妻郡嬬恋村に嬬恋出張所を置き（諸S10，上，p197）、嬬恋周辺での「土地経営及分譲」（諸S10，上，p197）を行った別荘業者であるが、大正末期には「松島肇氏の昌栄貯蓄銀行に対し二万七千五百余円の預金払戻の請求訴訟を提起」（T10.5.8 内報②）するなど「欠陥多き会社」（T10.5.8 内報②）とされた。悪評絶えぬ昌

写真－12 「嬬恋ホテル」写真（金子）

栄貯蓄銀行なんぞに「会社第一回払込金（此株数二千二百五株）」（T10.5.8 内報②）を預金するなど、“会社魔”松島肇[13]との「間には種々の事情の存在す可きは想像に難からざる所」（T10.5.8 内報②）と松島の同類と見なされた。

嬬恋ホテルを経営する中外拓殖の中心人物・宮崎寛愛については北海道錦町の開拓に関わり、「後ほど中外拓殖という土地会社を作ったが、満州までも手を広げ各地に出張所を作ったりしたが、山師気のある人」[14]とされ、宮崎に唆され中外拓殖への投資で大損した開拓民の名も列挙されている。泡沫業者の興亡には不明な点も多いが、ともかく地蔵川界隈には南木山の場合と同様に”会社魔”の同類の山師連中が出没していたことになろう。

７．高垣甚之助・松室致共有の法政大学大学村

高垣甚之助には「世の所謂『土地社会』の亜流」（地蔵，p5）に非ずとの見方もあるが、筆者の見立てでは法政大学のインテリとは程遠く、宮崎の同類に近い。『大学村五十年誌』は「宮家の牧場で…或る会社の所有地となり、後に松室先生の所有地となったのは大正八年頃だった…出資の関係上、高垣甚之助氏との共有地ということになっていた…けれども、大学村に関する限りにおいては、松室先生独自のお考で…昭和三年から村が出来ることになった」（大学村，p91）とことさらに高垣との無関係を強調する。大学村開村前の大正14年６月の新聞には高垣・松室共有の地蔵川避暑地組合の分譲広告が掲載されている。「軽井沢吾妻高原間　地蔵川避暑地分譲（軽井沢草津中間）（海抜四千呎）土地百二十五坪と十二坪の別荘附　特別提供二十戸限り金一千六百円也（土地のみ希望の方には特に御相談に応ず）。［交通］軽井沢より草津電鉄にて一時間余にして現地に達す。途中の風景は恰も瑞西山間旅行の感あり。［気候］盛夏と雖も八十度を超へず。紫外線豊富にして万病に効あり。軽井沢の如き結露絶対に無し。［付近の状景］草津。万座。鹿沢の温泉へ各四里。世界的奇勝溶岩渓へ一里半、周囲は白根。吾妻。浅間の高峰を望み。風景絶佳。水亦清し。高山植物豊富。［設備］ホテル。倶楽部。大運動場。学生保健協会宿舎等にして。近隣別荘所有者は何れも知名の士。東京市本郷区湯島五ノ四　地蔵川避暑地組合　電話小石川五〇七五番」（T14.6.14 読売③）

この広告の隣には学生保健協会広告が掲載されている。「夏期体育講習会会員募集、六月二十五日締切。会場　海抜四千呎の地蔵川避暑地（軽井沢と草津の中間）。期間　自七月十日　至九月五日（滞在日数各自適宜）。費用　入会金五円、滞在費一日金一円五十銭宛。●単に避暑滞在差支へなし。主催、東京本郷湯島五ノ四大日本学生保健協会（電話小石川五〇七五）、後援、地蔵川避暑地組合」（T14.6.14 読売③）

大日本学生保健協会は地蔵川避暑地組合の中にあり、電話も同一なので両者は一体関係にあると思われる。

昭和９年の案内書は「松室致氏所有土地を同校の教職員及び関係者に分譲して…長足の進歩をなして現今は二百余戸に達し、法政大学村と名づけ松室氏が村長」（誇り，p44）とする。しかしその後村民構成が変化、次第に法政大学との関係も薄れ、昭和12年開村10周年を機に村会制を組合に改め、単に大学村と改称、現在は社団法人北軽井沢大学村組合となっている。社団法人の大学村は業者の別荘地とは一線を画し、今なおサロン的な独特のコミュニティを形成している。

８．磐梯電鉄不動産→紀州鉄道不動産

これ以降も昭和10年代に大西土地拓殖の北軽井沢浅間高原別荘地、戦後は東拓興業のアヤメケ原文化村など多数の別荘業者が出現した。この中から地方ミニ私鉄との特異な関係が興味深い磐梯電鉄不動産の福島県から和歌山県へ“ワープ”した飛躍・変身ぶりを取り上げよう。磐梯電鉄不動産は福島県の磐梯急行電鉄[15]の旧経営陣の薬師寺一馬（熱海カースル社長）、住谷甲子郎（大蔵省 OB）らが電鉄の倒産後に別途設立し、新聞広告では「磐梯急行電鉄株式会社関連会社」（S45.10.29 読売⑬）を名乗った。同社は応桑で「北軽井沢休暇村別荘地」（S47.7.31 読売）を開発したが、売主は昭和48年４月以降紀州鉄道不動産（S48.6.6 読売⑭）に変更された。その不思議な背景はまず磐梯電鉄不動産が47年11月末に和歌山県の知られざるミニ私鉄・御坊臨港鉄道[16]の４万株のうち2.1万株を約１億円という豪快な買値で買収したことに由来する。この結果同鉄道「経営陣は交替し、昭和47年にはあらたに社長に」[17]磐梯電鉄不動産社長柏茂美が就任、翌48年１月１日御坊臨港鉄道は東京人にも所在地が分かる紀州鉄道に社名変更した。地元御坊の人は紀文の如きお大尽・紀鉄様の“喜捨”とでも感じたことだろう。これにともない「磐梯電鉄不動産株式会社は本日四月二十日を以て…紀州鉄道不動産株式会社と変更」（S48.4.20 読売⑭）した。新しい紀州鉄道不動産は新聞

広告で大手私鉄並の「紀州鉄道グループ」（S53.6.20 読売夕④）を名乗り、自ら紀州鉄道の系列不動産会社を装った。かって磐梯急行電鉄関連会社を名乗った例の手法を踏襲、「紀州鉄道と言えば、関西の私鉄」（S53.6.20 読売夕④）だと私鉄の有する絶大な信用力を活用しようとしたためといわれる。

注

⑴ 軽井沢文化協会編『軽井沢案内』軽井沢タイムス社、昭和38年，p12

⑵ 二代星野嘉助（国次）は明治末期に赤岩鉱泉を買って鉱泉宿を初め、軽井沢に温泉があれば鬼に金棒と思ってさらに熱い湯を求め温泉掘削に邁進、大正12年神社風の浴場・明星館を建てた。（日帰り入浴施設「トンボの湯」は平成14年開設）

⑶ 観光デザイナーの意味する所は拙稿「“観光デザイナー”論―観光資本家における構想と妄想の峻別―」『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』第14号、平成24年９月参照。

⑷ 稲垣虎次郎（漂萍）『大軽井沢の誇り　草津温泉の誉れ』昭和９年を単に「誇り」と略したように、主要な北軽井沢の文献・資料一覧は以下の略称を使用した。

宍戸…宍戸實『軽井沢別荘史　避暑地百年の歩み』住まいの図書館出版局、昭和62年
ノート…安島博幸・十代田朗『日本別荘史ノート』住まいの図書館出版局、平成３年
堤…由井常彦・前田和利・老川慶喜『堤康次郎』リブロポート、平成８年
一班…『草津軽便鉄道株式会社状況一班』大正２年
水野…水野豊（紫伴）『紫文集』日比谷書房、大正９年
金子…金子常光画『草津軽便鉄道沿線案内』大正12年11月
社債…「鉄道財団担保付草津電気鉄道株式会社社債募集」織田信託、大正14年９月
萩原…萩原太一郎（秋水）（草津の旅館・七星館元社長）『改訂六版　草津温泉』草津鉱泉取締所、大正15年
地蔵…『地蔵川温泉避暑地土地分譲』緑会、昭和２年４月
柏村…柏村一介編『昭和国勢人物史』昭和３年、極東社
遊覧…『軽井沢・草津遊覧案内』草津電気鉄道、昭和４年
日本…『日本唯一の高原電車　草津電気鉄道沿線案内』
湯河…湯河俊次『軽井沢と付近鳥瞰図』昭和６年８月
軽井沢文化協会編『軽井沢案内』軽井沢タイムス社、昭和38年
角貝…角貝康次『草津躍進誌』草津新聞社、昭和38年
星野…星野嘉助（三代）『やまぼうし　星野温泉のあゆみ』星野温泉、昭和47年
幅…幅北光『軽井沢ものがたり』信濃路、昭和48年
歩み…『草軽交通の歩み』草軽交通、昭和48年
『長野原町誌　下巻』昭和51年
嬬恋村誌編集委員会『嬬恋村誌上下巻』嬬恋村役場、昭和52年
大学村…『大学村五十年誌』北軽井沢大学村組合事務所、昭和55年
町誌…『軽井沢町誌　歴史編（近・現代）』昭和63年
きたかる…地域情報誌『きたかる』２号、北軽井沢じねんびと（北軽井沢コンソーシアム協議会を継承）、平成24年４月配布
［新聞・雑誌］東朝…東京朝日新聞、読売…読売新聞、D…ダイヤモンド、内報…帝国興信所内報、［会社録］帝…帝国銀行会社要録、諸…日本全国諸会社役員録。

⑸ 安島博幸氏が「明治四一年、会社社長松本隆治は、北白川牧場跡に地蔵川別荘を開発した」（ノート，p94）と簡潔に表現された箇所に関し、宍戸實氏による年表の記述昭和２年「北軽井沢北白川宮牧場払下げを受け、法政大学村建設を計画」（宍戸，p278）は吾妻牧場株式会社、草津軽便鉄道等を中間省略している。

⑹ 今回訪問した北軽井沢観光協会「北軽井沢ふるさと館」で展示中の草津電気鉄道増資優先株募集附図『吾妻別荘地平面図』（大正13年）など貴重な資料群に多くの啓発を受けた。収集、情報発信等に尽力されている佐藤淳氏らのご努力に感謝する。

⑺ 拙稿「第二の軽井沢を夢想した“観光デザイナー”松本隆治と宮崎寛愛―観光リスクマネジメントの観点から―」『彦根論叢』第399号、平成26年３月参照。

⑻ 明治43年５月５日草津興業による軽便鉄道許可。大正元年９月草津軽便鉄道設立。大正13年２月草津電気鉄道に改称。

⑼ 「明治四十二年十二月　検査官提出書類綴」『北海道拓殖銀行文書』、北海道開拓記念館所蔵。

⑽ 川島宗兵衛家の八代当主・川島民親氏の話。

⑾ 応募株主への無償提供地を示す附図が上記⑹の平面図である。詳細は拙著『企業破綻と金融破綻―負の連鎖とリスク増幅のメカニズム―』九州大学出版会、平成14年，p479以下参照。

⑿ 34年７月１日改正時刻表による。

⒀ 松島肇は拙著『「虚業家」による泡沫会社乱造・自己破綻と株主リスク―大正期“会社魔”松島肇の事例を中心に―』滋賀大学経済学部研究叢書第42号、平成18年参照。

⒁ 錦町百年史第３章 www.phoenix-c.or.jp/~ryousi/sub113.htm（平成25年12月１日検索）

⒂ 磐梯急行電鉄は1968年倒産、1969年鉄道廃止。竹重達人『ローカル鉄道の旅』産業能率短期大学出版部、昭和47年、p99-101、『写真でつづる懐かしの沼尻軽便鉄道』同刊行委員会、歴史春秋社、平成12年、『続・懐かしの沼尻軽便鉄道』歴史春秋社、平成13年など多数あり。

⒃ 御坊臨港鉄道は赤字3,300万円、借入金6,000万円という厳しい経営状況にあった。

⒄ 広報誌『ぱるこおる』紀州鉄道不動産、昭和48年１月，p20。